

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年5月18日現在

機関番号：17201

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K21227

研究課題名(和文)九州北部地域に広域避難した子育て中の家族への支援施策モデルの開発

研究課題名(英文) Development of the support model for evacuees who were families with children to the northern Kyushu area

研究代表者

松永 妃都美 (Matsunaga, Hitomi)

佐賀大学・医学部・客員研究員

研究者番号：60612017

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：東京電力福島第一原子力発電所の事故を契機に九州北部地域に自主避難した母親への面接調査を行い、母親が自主避難を実行するまでの心理行動プロセスと、自主避難を実行してからの継続プロセスを明らかにした。さらに母親の放射性物質へのイメージを整理した。これらの成果から、避難の自己終結にむけた支援への示唆を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現行の放射線被ばく教育では、原子力災害で非常に多くの自主避難が行われることが想定される。放射性物質を避けるための自主避難が直接的な被ばく影響を上回る危険性は払しょくできず、福島第一の事故で得られた知見を今後の原子力災害対策に活かす施策と研究の推進が肝要である。本研究では子育て中の自主避難者に焦点をあて、心理と行動を深く理解した医療専門職の支援について検討した。

研究成果の概要(英文)：Semi-structured interviews were conducted with mothers who had evacuated with their children to the northern Kyushu area after the accident at the Fukushima dai-ichi nuclear power station. We clarified the psychological and behavioral processes before and after the evacuation. In addition, we have revealed their radioactive material images. These results suggest how to support evacuees who are at the end of self-imposed evacuations .

研究分野：災害看護

キーワード：東京電力福島第一原子力発電所事故 自主避難 母子避難

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

2011年3月の東日本大震災に併発した東京電力福島第一原子力発電所(以下、福島第一原発)の事故では、多くの自主避難者が生じた。特に九州北部地域には家族が離散している母子避難が多く、母親の心身ストレスや養育への悪影響が懸念されていた。2012年「原発事故子ども・被災者支援法(略称)」が制定され、原発事故に特化した被災者支援施策の法整備がなされた。しかし、この原発事故を取り巻く課題は混沌を極めており、法律の基本方針のみならず同法に基づく具体的な支援施策も制定されていない。

福島県避難指示区域からの避難者と比較して自主避難者は、その帰還や移住のタイミングや決断を自らの意思で決定することができる。しかしながら多くの自主避難者が、帰還や移住の決断が行えず、自主避難を継続していたことが報告されていた。特に放射線感受性が高い子どもの母親への支援が重要課題であった。

## 2. 研究の目的

そこで本研究は、九州北部で自主避難を継続していた母親の社会的背景や心理、行動を分析し、母親が自らの意思で避難生活を終結する支援のあり方を提言する。

## 3. 研究の方法

九州北部の自主避難者のうち、福島第一原発事故当時に乳幼児を養育していた母親を対象とした面接調査を実施した。面接内容は福島第一原発の事故前後における自身の変化や避難先地域での思いや出来事等とし、内容分析、複線径路等至性アプローチ(Trajectory Equifinality Approach 以下、TEA)、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(Modified Grounded Theory Approach: 以下、M-GTA)で解析した。

## 4. 研究成果

32名からの協力を得た。避難元は福島県のほか、茨城、東京、千葉などであり、面接当時13名が母子避難、そして18名が母子避難経験者であった。

### (1) 自主避難を実行するまでのプロセス

TEAでの分析を行い、母親が自主避難を実行するまでの心理行動プロセスを社会的な出来事を踏まえて明らかにした。母親は避難元生活の中で「子どもを被ばくさせた罪悪感」に苛まれていた。そして自主避難を実行する際には【築きあげた生活や人間関係を捨てる覚悟】を行っていた。

### (2) 自主避難を継続するプロセス

母子避難に焦点をあて、M-GTAで母子避難の継続プロセスを明らかにした。母親は、【被災者として避難先地域に馴染み】ながら、避難生活の中で【健康影響リスク回避の実感】と【心地よい人間関係を構築】していた。そして【母子避難という選択への納得】を行っていた。

### (3) 母親の放射性物質へのイメージ

母親の放射性物質へのイメージを内容分析で整理した。母親のイメージは総じてネガティブであり、一部には科学的な知見と乖離したイメージも確認された。

## 5. 総括

自主避難の概念が、避難指示地域の解除に伴い多様化している。本研究においては母親の認知で避難継続の有無を判断したが、万が一の原子力災害に備えて、法整備と放射線健康影響やリスクトレード等の理解の推進が肝要である。

本成果を総括すると、自主避難者が避難生活を終結する際のポイントは、自主避難者の価値観を尊重して理解することである。福島第一原発の事故で放出された物質からの直接的な健康影響は、遺伝的な影響も含めて考えにくいとされている。しかしながら自主避難という選択を否定することなく、母親の自己決定を尊重することが極めて重要である。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計7件)

1. **松永妃都美**. 乳幼児とともに東日本大震災を経験した母親の防災対策、日本小児看護学会誌、28、pp101-106、2019。(査読有)
2. **松永妃都美**. 福島第一原子力発電所の事故を契機に自主避難をした母親が避難先地域との関わりの中で母子避難を継続していくプロセス、日本看護科学学会、38、pp107-114、2018。(査読有)
3. **松永妃都美**. 乳幼児を養育していた母親が福島第一原子力発電所事故の放射線被ばく回避を目的とした自主避難を実行するまでのプロセス、日本地域看護学会、21(2)、pp14-21、2018。(査読有)
4. **松永妃都美**. 東日本大震災の影響を経験した母親の防災対策の実行への思い、母性衛生、59(1)、pp29-36、2018。(査読有)
5. **松永妃都美**、新地浩一. 大規模な災害を乳幼児と経験するということ - 母親達のストレス要因となる被災経験とは -、日本災害看護学会誌、Vol.18(3)、pp3-12、2017。(査読有)
6. **松永妃都美**、新地浩一. 子どもと母親への災害時の心身医学的支援、心身医学、57(3)、251-256、2017。(査読無)
7. **松永妃都美**、田中沙恵、石橋秋奈、新地浩一. 東日本大震災被災者の防災対策の実行に影響を与える災害への意識、日本集団災害医学会誌、Vol.21(2)、pp210-215、2016。(査読有)

[学会発表](計14件)

1. **松永妃都美**、野中良恵、新地浩一. 自主避難を継続する母親の福島第一原発の事故で放出された物質へのイメージ、第24回日本災害医学総会・学術集会、米子、3/2019。(口演、査読有)
2. **Matsunaga H**, Fukuyama Y, Nonaka K, Tanaka S, Ishibashi A, Shinchi K. A Disaster Risk Reduction Framework for Family with Children in Japan, Kobe, 10/2018。(ポスター、査読有り)
3. **松永妃都美**、野中良恵、石橋秋奈、田中沙恵、福山由美、新地浩一. 避難を継続する母親の放射線イメージ 避難指示区域外の避難者調査から、第6回日本放射線看護学会学術集会、名古屋、9/2017。(口演、査読有)
4. **Matsunaga H**, Tanaka S, Ishibashi A, Fukuyama Y, Shinchi K. Disaster Prevention Measures in Mothers Who Experienced the Great East Japan Earthquake, Asian Society of Human Services Congress, Busan Korea, 9/2017。(口演、査読有)
5. **松永妃都美**. 母子避難者が避難を継続するプロセス、第22回日本看護研究学会九州・沖縄学術集会地方会、2017。
6. **松永妃都美**、福山由美、石橋秋奈、田中沙恵、野中良恵、新地浩一. 福島第一原子力発電所の事故を契機に被災地を離れ、避難先での生活を継続する母親 - 複線経路・当時性アプローチ (TEA) -、第14回日本質的心理学会、東京、10/2017。(ポスター、査読有)
7. **松永妃都美**、野中良恵、田中沙恵、石橋秋奈、福山由美、新地浩一. 避難を継続する母親の放射線イメージ 避難指示区域外の避難者調査から、第6回日本放射線看護学会、2017。
8. **Matsunaga H**, Tanaka S, Ishibashi A, Fukuyama Y, Nonaka K, Minamijima R, Shinchi K. Disaster preparedness Required for Families with Children in Japan. Asian Society of Human Services Congress, Fukuoka, 7/2016。(口演、査読有)
9. **松永妃都美**. 大規模な災害を乳幼児と経験した母親の被災経験の様相、第47回日本看護学会ヘルスプロモーション学術集会、三重、2016。(口演、査読有)

10. **松永妃都美**, 福島第一原子力発電所の事故を契機に乳幼児と広域避難した母親の行動と心理の時系列変化、第 5 回 日本放射線看護学会学術集会、2016.
11. **松永妃都美**、新地浩一 . 東日本大震災を乳幼児と経験した母親の防災対策への認識、第 18 回日本災害看護学会誌、2016.
12. **松永妃都美**、新地浩一 . 被災経験者の知見を活かした乳幼児防災対策構築の試み、第 20 回看護研究学会 九州・沖縄地方会学術集会、2015.
13. **松永妃都美**、新地浩一 . 大規模災害を契機に乳幼児と被災地を離れ、九州北部での生活を継続する保護者達の人生の径路-複線径路・等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach : TEA) -、第 12 回日本質的心理学会、2015.
14. **松永妃都美**、新地浩一 . 乳幼児と東日本大震災を経験した保護者の防災対策と防災への意識変化、第 17 回日本災害看護学会、2015.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。